

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

<コロナ感染急増、オリ・パラ強行で分かってきたこと>

(主宰:吉田千秋)

かれこれこの1年半、無為・無策・愚策続きの失政によるコロナ感染急増と、東京オリ・パラの強行開催によって何が起きてきたのでしょうか。

様々な論評・指摘にできるだけ目を通し、いろいろ考えさせられました。そこでボクなりにはっきり分かってきたことは、日本は政治的にも、経済的にも、何よりも思想的・文化的に、明らかにもう先進国でも何でもなく、ひたすら下降、衰退の方向に歩んでいるということです。

いうまでもなく、この見解はバブル崩壊後から様々に提起されてきました。だが、見せかけの「景気回復」、「就労率回復」などに目を逸らされて、人口減少化、中小零細企業の倒産、非正規労働者の激増、若者・女性・老人・外国人労働者の苦境など、数々の深刻な事態は、多くの人には十分には受け止められないままに推移したように思われます。それは、日本はまだまだ「先進国」で、「豊か」で、「伸びしろはまだある」、「衰退などしていない」、「日本は破綻しない」という、根拠のない楽観論を背景にしています。

事実は、経済面での国際競争力は、国際経営開発研究所 (IMD)によれば、日本は2020年度の発表では63カ国中34位、2021年度は31位です。教育水準では近年特に読解力がかなり低下しているとされ、科学研究ではついに論文数などで4位になり、中国、韓国の台頭が目立っています。さらに、例の「ジェンダーギャップ指数」は2021年発表で120位(対象153カ国)です。国連機関による「世界幸福度ランキング」は年々下がって2020年発表では62位。そして、何よりも、「将来への希望」を持っている若者が62%しかなく、「自分の参加によって社会が少しでも変えられる」と思っている若者は30%しかなく、断トツに低い、

等々。多くの調査が、日本の衰退を語り、明るい将来への活力が見出せません。

あきらかに政治・社会の根幹が揺らぎ、弱体化し、腐敗しているように思われます。これを見事に露呈したのが今回のコロナ感染対策の無策の連続であり、人命無視の東京オリ・パラの強行ではないでしょうか。「大震災からの復興」「新型コロナに打ち勝った証」「人類がさらに絆を強めた象徴」という看板は、ことごとく化けの皮がはがれてしまっています。いまや「希望の灯り」とは正反対の、「絶望」の淵に誘い込む「玉砕」へ向かっています。

どうしたらよいのか？ したり顔しても、あきらめても、嘆いても何も生み出さない。ボクら一人ひとりがこの苦境、難局をしっかりと見据え、ここから新たな方向へ向かわなくては。そのためには、今まで通りの「大国意識」「<豊かさ>願望」「自分第一」「差別快感」などからみとられていた「狂気」から、落ち着いて「正気」を取り戻すことではないでしょうか。とりわけ苦難・苦境に陥っている人たちの状況をしっかりとみつめ、お互いにできることを探し求めたいものです。



(書齋に巣ごもり中)

例会休止。便り、意見など

○＜健全な精神は健全な肉体に宿る＞

日本選手の活躍を見ていると、コロナ禍の深刻な社会状況を気にかけてはいるのかもしれませんが、好成績を挙げるその集中力、それを生み出す精神の強靭さを感じます。新聞の1面に大きくコロナ禍と選手の活躍が並立するというのはブラックユーモアですが、選手の活躍と沈黙もまたそのように感じます。

森JOC前会長は元ラグビー選手、菅首相は空手二段、ナチを肯定する発言をした麻生副総理は元クレー射撃のオリンピック選手、バツハIOC会長は元フェンシングのオリンピック選手。緊急事態宣言中、ポロシャツで不要不急でない銀ブラをするその鈍感さも、強靭な精神あつてのことでしょう。

社説で開催反対を主張したのも一転、1面とは別に朝刊では5面、夕刊でも2面にわたり選手の活躍を称えた新聞。五輪憲章で、参加は個人資格、国別のランク付けは禁止とされていても、各国別のメダル数を詳しく知らせてくれた報道機関。これら独自の姿勢もまた強い信念に支えられたものなのだろうと思いました。

(森)

○＜学徒動員はやめろ＞

小池都知事は、何を考えているのか。パラリンピックへの小中学生の観客動員を強行しようとしている。最近、十代の感染者が急増していることを当然知っ



ているはずである。何もない時ならば、都知事の言う意義もあるであろう。しかし、十三万人もの動員は、必ず感染を引き起こし、重症化、場合によっては死亡に至る可能性があることは、容易に考えられる。多くの国民の反対を押し切って、オリンピックを強行した。都民には、「人流を減らすために、外出を控えよ」と言いながら、そんな矛盾した都知事の姿勢に都民が従うはずもなく、オリンピックは感染拡大の一因となった。

小中学生の命の危険を冒してまでの動員にこだわる都知事はもはや人災である。今回のコロナ感染における政府や都知事の失政は、第二次大戦の軍部の無謀による大惨事の結果としての敗戦に例えられる場合がある。今回の事例は、まさに現代における人命軽視の学徒動員であり、絶対に許せない。

(Shigeaki)

○＜オリンピックとコロナ禍の裏で＞

「2020東京」ほど、オリンピックが抱える問題点を、正しい意味であぶり出したオリンピックはなかった。しかし、コロナ禍も含めてこの夏の惨状の裏で、目立たないが危険なことが進められているのではないか。

まず「世界」9月号で前田哲男氏も指摘する、軍備強化(中距離ミサイルを含む)と「戦争法」を根拠に進んでいる対中軍事包囲網への参加だ。他国との軍事的対立が何をもたらすか考えるまでもない。

次は、「少子化」と言われる中で議論が分かれるが、数年前から全国各地で進められる学校統廃合(小中一貫校化)の動きが加速していることだ。統廃合は学校現場からではなく行政の「経費削減」から出ている。小規模学校を潰して大規模学校に子供を追い込む、そこでは子供一人一人を教員が丁寧にみることはできない。そう言えば政府が進める病床削減もよく似た構図だ。

私が気づいたのはこの二つだが、他にも惨事の裏で何が行われているか要注意だと思う。

(井川敏郎)

○＜日本の風、世界の風＞

オリンピックが閉幕した。その評価は菅政権の支持

率低下が示しているように、国民の不満を募らせるものだった。その一つが、サッカーだ。息子は大のサッカーファンで、私もWカップ等の観戦に熱を上げたものだが、このオリンピックにはオーバーエイジ枠でも有名どころのサッカー選手が来ていない。息子に言わせればヨーロッパでは9月は、チャンピオンズリーグが控えているので、有名クラブチームに所属している名選手はオリンピックどころではないというのだ。外国でプレーしている選手も多いと紹介されるが、チャンピオンズリーグに出られるハイレベルの選手はいないそうだ。

サッカーは16チームのリーグ戦だが、予選、準々決勝戦は、日本戦しか放送されなかった。それも日本選手の解説ばかりで、対戦国の南アフリカなど陽性感染者が何人も出たのだがそんな報道はされなかった。そして準決勝、3位決定戦、日本は圧倒的な力をみせつけられ惨敗した。ブラジル対スペインの決勝戦はサッカーの醍醐味を見せてくれるハイレベルなものだった。テレビ欄では20時キックオフとなっていたが、日本が出場できなくなると地上波でもBSでも生放送されず、日本の金メダル獲得スポーツの裏番組として遅れての放送となった。

「勝った、勝った」の報道しかしない日本。国内に吹いている演出された風と世界の風の流れは違う。

(かこちゃん)

○子供の頃から体育が大嫌いだった。運動会などほとんどトラウマで、中学校以来体育教師は天敵というわけで、体育会系の行事にはほとんど興味がなかったため、オリンピックに大騒ぎする人の気が知れない。



仮に、自分の子供や孫がオリンピック選手になっても「あ、そう！」と言うくらいだと思う。コロナ下で大多数の人が苦境に陥っているのに、また感染の危険があるのに開催を強行する蛮勇には言葉もないし、オリンピックに費やす大金を自分たちにまわせと、困っている人達が何故怒らないのか不思議だ。自分の友人たちもオリンピックなんぞやめちまえと言う人ばかりなので、こういう人がもっともって増えて、腐敗したIOCなど解体し、それでもやるというなら未来永劫、発祥の地ギリシャのアテネでやれよと考える次第。

(YS)

○東京オリンピックは、結論としてはやるべきではなかった。当然、パラリンピックもやるべきではない。オリンピック自体については賛成であり、4年間全てを投げ打って精進してきたアスリートの努力を披露する場所として、世界に発信する機会が必要であり、誰も異存はないであろう。問題は一部の特権階級の利益になるビジネス化が進むことや、一部の政治家の功績にしようとして企む姿勢である。私自身は、アスリートの努力に報いるため、ある程度の妥協の産物として開催する判断も理解してきたつもりではあった。

しかし、今回の東京オリンピック開催と現下の感染爆発について、某首相は因果関係はないと断言しているが、関連性は火を見るよりも明らかである。この結果を踏まえても、なお、より感染リスクの高いパラリンピックのアスリート達を、世界から今の東京へ集め

ることは自殺行為であり、無責任極まり無い。アスリートファーストであるなら、また国民の命を守るというその言葉が本心であれば、今からでも中止すべきだ。

(ryosa)

○ <最近の新聞記事から>

毎朝、新聞を読むと、腹の立つ記事ばかりである。しかし、嬉しいニュースが飛び込んできた。ご存知のように、横浜市長選で野党系の山中竹春氏が、与党系の小此木八郎らを破り、初当選した。興味深いことは、どちらもカジノを含む統合リゾート施設(IR)の反対であったにもかかわらず、片方は落選。しかし、何と言っても、小此木氏を支援した菅政権の新型コロナ対策をめぐる失政は大きく、菅政権に対する有権者の厳しい審判が下されたとも言える。国民の目は横浜だけに向けられているわけではないと思う。コロナ禍のさなか、全国民の苦渋・苦悩は限界を超えている今日、自民党与党政権は、オリンピックを強行し、コロナ感染者を急増させる結果を招き、チグハグな後手・誤手に走っている。このような内閣を後押ししている自民党与党の責任は重大である。諸悪の根源は自民党与党なり。横浜市長選のみならず過去の野党連合の勝利の経験を活かし、まず、与党政権を倒すための大局を見据えた柔軟な野党連携を強く願うものである。

(島田)

○<アメリカのアフガンからの「撤退」>

国内問題については、なんかもう疲れてコメントする気にもなりません。海外の出来事でアレッと思ったことがありましたのでそれについて述べてみたいと思います。

偶然にも8月15日、日本の終戦記念日と同じ日にタリバンがアフガニスタンを掌握しました。そして、その日の星条旗新聞[アメリカ軍の機関紙]の一面は、イツオーバーとだけ大きな文字が書かれていました。それに対する自分の感想は、オーバー、終わっただとなんで敗北と書かないんだという事と、日本が「敗戦」を「終戦」と言い換えてるのと同じで、アメリカ帝国も落ちぶれたなというものでした。まだ敗北とはっきり認めたほうがさすがアメリカ帝国とまだ思



います。これで紆余曲折はあるでしょうが中長期的にはアメリカ帝国および、西欧諸国、はっきりいえばキリスト教文化圏諸国の衰退は明らかでしょう。このことを前提として今後の過ごし方を考えていかなければいけないなと再度思いました。

(たなか)

○「この先めざす社会は？」について次の3人は政府の存在を容認しつつ次のように言っている。

『疫病と人類』の山本太郎さんは「市民の力の獲得を得た民主的手法を通じた社会」が求められる。

斎藤幸平さんは民主主義を刷新しつつ、「信頼と相互扶助」を「基礎」とする「コモン」が共同管理をする。

マイケル・サンデルさんは、「労働の尊厳」を取り戻しつつ「共通善」に到達し、それを共通項として物事に対応して行く

私は、自分の場で民主主義を推し進めつつ多くの人たちがそれぞれの場での民主主義の広がりも期待している。

(アダム・スミス)

<京都だより その5> 「京都駅の繁栄」

明治当時、鉄道の駅は、街の中心や繁華街を避け設けられることが多かったようです。蒸気機関車からの煤煙が嫌われたからです。

京都駅は、崇仁という被差別地区の東隣が選ばれました。駅西側は市の改良住宅が建ち並び革製品を扱う靴店や朝鮮料理店も残っています。この辺りは、「オールロマンズ事件」(1951年、市職員によるこの地区の生活を差別的に描いたとされ糾弾)の背景となった所で、かつて強いられた劣悪な生活(1950年代半ばまで水道・ガスなし)を記録する資料館もあります。市立芸術大学の西京区からの移転が始まり、かつての古い集合住宅は取り壊され更地となっています。新しいものにより、以前のものの記憶がまた薄れることと思います。

今の京都駅は、JR5線・近鉄・地下鉄が乗り入れる大きな駅であり、駅ビルは延床面積西日本一の巨大建造物(JR京都伊勢丹・ホテルグランヴィア)です。多くの観光客と通勤客、そして買物客が行き交う華やかな所ですが、敗戦後しばらくは他都市の駅と同じように多くの戦争孤児が集まる場所でもありました。6年程前、当事者の話を聴いて知ったことです。柱の陰で寝泊りもしますが、寝ているのかと思ったらいつの間にか命は失われている。そんな姿が日常だったと語られました。

このことを伝える像をJR京都駅構内に造る計画もありましたが反対され、それは私が話を聴いた下京区の佛光



「せんそうこじぞう」(佛光寺大善院)

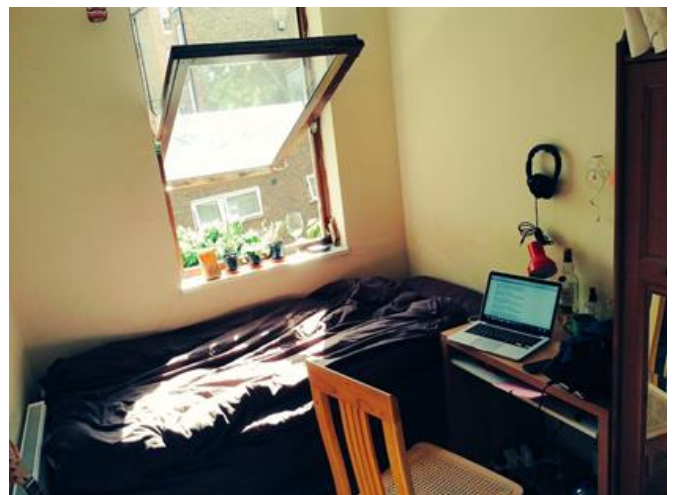
寺大善院の境内に小さく立っています。駅の構内にあるのは平安京の正門羅城門の縮小模型(幅8m、高さ2.4m)で、10分の1とはいえ当時の威容を感じ都の歴史を偲ばせるものですが、小説『羅生門』にも描かれているような飢えや病気で死んだ庶民が周りに多くあった様子は伝えていません。

造る者と庶民。羅城門は後世の私達が平安京の繁栄を思うものとして、京都駅は利用するには十分に役立つものとしてありますが、この度、そこにあった陰の部分の思い起こしたことでした。

(hiro)

<世界一周貧乏旅 その24> 「夏の終わりと理不尽な大家」

今日も暑いね。という会話が、まだ暑いね。という会話に変わっていくのを聞くと、突然はっとして、今年が残り3ヶ月で終わってしまうのだと寂しくなり、同時に夏服の衣替えのように環境の変化と転換を実感せずにはいられません。6年前の今頃、イギリスでワーキングホリデー中の僕は、半年住んだシェアハウスを引っ越す時でした。そこは3階建ての一軒家で、大家を含め7人でシェアしており、そこそこに綺麗でそこそこの家賃、いわゆる無難な物件でした。ただ一つ、僕と入れ替わりの住人が「あの大家のばあさんには気をつける」と言い残したことが気がかりではありました。しかし住んでみればなんてこともなく、事件なんて起きないなあと思って半年経とうとしたある日、大家が突然「家賃を値上げしていいか」と言ってきました。どうやら不動産価値が高騰し続けるロンドンの状況を考え、「もっともっと



家賃を上げて人もは住みたがる」と欲を出したようでした。

当時のロンドンの不動産価値は毎年ものすごい勢いで上昇しており、ロンドン市内で一人暮らしをしようとすると驚くほどに高額で、若者は皆仕方なくシェアハウス暮らしを強いられているという状況でした。それでも、シェアハウス暮らしの一月の家賃は東京でアパート暮らしをするのと変わらない値段なのです。

さて、僕はもちろん拒否し、大家はそこでは引き下がりました。が、後日彼女は突然僕に「甥がこの部屋に住むので出て行って」と言い放ちました。あまりの意味のわからなさにはびっくりしましたが、恐らく彼女に甥など存在せず、家賃上げを断る僕を追い出し釣り上げた家賃設定で新たな人間を住まわせようという魂胆のようでした。

その後、大家と僕で大喧嘩が起き、結局僕は追い出され、喧嘩の仲裁と僕の肩を持ってくれた優しいハウスメイトに見送られながら、僕は新たな家へ引っ越したのです。

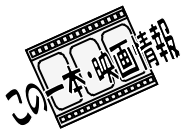
あれから6年経ちますが大家の顔はもう覚えていません。逆にそのハウスメイトとはイギリスを出たあとも連絡を取り続けました。今回のことをたまに人に話すのですが、そ

れ以外の日常で大家のおばあさんことを思い出すことはなく、今や笑い話の登場人物というだけで、また会いたいとも人生の栄養になる存在だとも思いません。

結果的に次に住んだ家は前より良い家でしたし、新たな大家はずっと親切な人でした。今回

の環境の変化と転換には大喧嘩が伴いましたが、もう会いたくない人のことは忘れてしまおうし、また会いたい人とは繋がり続けるんだなあ、夏が終わるころにはなんだかそんなことを考えます。

(カモノハシタニ)



宮本正樹監督「国民の選択」 2021年3月公開

先日、映画「国民の選択（監督宮本正樹）」とトークショー（監督・俳優2名）に参加した。ストーリーは20XX年に、国会で原発に反対する議員たちから「原発を禁止する憲法案」を発議し、国会議員3分の2以上の賛成で、「原発を禁止するかどうか」の国民投票を実施することになったとの想定。

それを受けて町会議員である主人公は、妻、息子、娘に「家族会議」を通して家族全員に原発賛成への投票を指示するが、家族の「原発への対応」はさまざまであり、国民投票をきっかけに、家族の心が微妙に揺れる姿を描いている。「家族会議」は普段の実践は難しいが、家族間でも自由に意見を出し合うことの素晴らしさを教えてくれている。

山田洋次監督の評は「ぼくたちの国に原発は不要だということを分かり易い教科書のようにきちんと伝えてくれる映画である」。

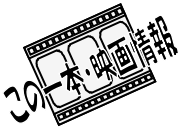
また、政府エネルギー基本計画の改正案では「再

生エネの最優先」を明記するが、原子力の比率は20～22%の据え置きであり、大震災後の「我が国は原発を全廃し原子力は不要」の勢が弱まり「脱炭素」を理由の「原発復権の声」に要注意である。

なお、この映画を岐阜でも上映するように取り組んでおりますので楽しみにしてください。

(井口)





橋本 一監督 「HOKUSAI(北斎)」2021年5月公開

< 今を生きるHOKUSAI >

この映画のタイトルが「HOKUSAI」であること、企画・脚本を手掛け北斎の娘・お栄で出演している河原れんの多彩さに注目。監督・橋本一と話し合っただけで決めたという北斎のダブルキャストの発想にも惹かれる。

江戸時代末期・飢餓、伝染病、大火に幕府は町民に質素・儉約を強い、娯楽や浮世絵も取り締まりの対象となる。歌麿や写楽を抱える版元・蔦屋重三郎(阿部寛)も役人によって春画や美人画が焼き捨てられる。「出る杭は打たれる。うちが江戸中で出る杭になったということだ」と反骨精神を見せる。蔦屋を訪ねた北斎に、歌麿は「お前の絵には色気がない」と言われて憤り、蔦屋には「何のために描く」のかと問われる。「絵なら下っ端からでも這い上がれる」というものの、自分が描きたいものは何なのか、もがき海へ。沖へ進む彼を襲う波、砂浜に描いた波が蔦屋の評価を得て、北斎の絵は世の中に出る。「描きたいものを自由に描きたい」と幕府が人々の喜び絵を禁止することに反発する北斎を、蔦屋は「絵で世の中変えられる」と彼の独創性を後押しする。

老年期の北斎を演じるのは田中泯。彼の迫力に圧倒される。

版画家も抱え、弟子と娘お栄も加わってひたすらに自分が描きたいものを求める北斎。武士の身分を隠して禁止されている戯作を書く柳亭種彦の作品の挿絵を描くことで彼に共鳴する。上役から厳しく書くことを禁じられるが筆を折らない彼は、表現の自由を貫いて惨殺される。知らせを聞いて北斎は、周囲の人から「こんな日に」と言われて「こんな日だから描く」と筆を執る。江戸庶民の暮らし、空っ風に巻き上げる衣類を抑えながら歩く人々の姿、その情景を地面に描く北斎。70才を迎えて脳卒中で倒れて命は助かったものの、麻痺が残った体で一人旅に出てみた光景を描いたのが「富岳三十六景」。「神奈川沖浪裏」は「グレート・ウェーブ」で世界的にも高い評価を受けている。「まだまだ勝負したいのだ世の中と」、そして「いつかは人に指図されずに生きることが出来る世の中が来る」と、生涯に34,000点に及ぶ作品を残している。90才で死を迎えて、「あと10年せめて5年描けたら本物の絵が描ける」と言ったといわれる。(いわたかこ)



例会への事前申し込みは不要です

例会会場案内

例会は、ポポロのふれあいスペースです



例会は19:00～21:00です。

会場は、ふれあいスペースです。コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。

2021年後半 哲学カフェ、第26期の予定

第158回例会 8月12日(木)	休止します お盆とコロナ感染対策のため
第159回例会 9月9日(木)	<p>「東京オリンピック強行、どうだったのか？」</p> <p>緊急事態宣言中につき</p> <p>中止します</p> <p>* 加速するコロナ感染増と医療危機の中での強行。さまざまな問題が露呈した。 * オリンピックのもう開催しないなど、あらためて抜本的に見直す必要があるようだ。</p>
第160回例会 10月14日(木)	<p>「テレビ番組とどう向き合うのか？」</p> <p>* テレビの衰退が言われているいま、本当に楽しく、有意義な番組はあるのか。 * 報道番組、ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティ番組等、推奨したいものは？</p>
第161回例会 11月11日(木)	<p>「総選挙はどう仕組み、その結果は？」</p> <p>* 安倍政権を引き継いだ菅政権は、無策・失策続きで、総選挙は勝算が見えない。 * どうとう議員満了まで引き延ばし。五輪強行、ワクチン頼みの結果はどうか？</p>
第162回例会 12月9日(木)	未定。現時点では、日米・日中関係等を検討中。

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願ひます。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



わいわいがやがや アラカルト

★友人の薦めで大西暢夫著『ホハレ峠』を読んだ。副題は一ダムに沈んだ徳山村100年の軌跡一で、村の一番奥の角入(かどにゅう)集落に生まれ育った人の物語だ。著者は池田町の写真家で、30年にもわたって住人と交流し、録音テープとフィルムに記録してきた。

★山の生活には今とは違う異質の豊かさがあった。衣食住に必要な物の大半を自給できる自然、そこから得たものを生かす様々な技や知恵、家族や集落の人々の濃密な支えあい、それらが基盤となって山村の暮らしは続いてきた。

★山人の暮らしも、現金収入を求め、外へと広がった。峠を越えての交易が増え、出稼ぎ、集団就職、そして村外へ、中には北海道開拓に赴いた人もあった。本書の中心人物広瀬ゆきえさんも、縁あって開拓に出ていた門入出身者に嫁ぎ、真刈村で結婚生活を始めた。新しい環境下での厳しい試練も、徳山で養った

生活力がモノをいい、そこに根付くことができた。でも、一家は結局7年後徳山に舞戻ることになった。故郷の「血」が帰村を促した。

★その辺の顛末やその後について触れる余裕はない。が、彼らの故郷が水底に沈んでも、顧みられることがない民草の、その歩みを同じ目線から包み込むように見つめる本書は、今日でも希少だ。そこには、水底から徳山の過去を救い出すことで、今に通じる大切な価値を再発見したいとの思いが滲む。

★考えてみれば、日本各地にこうした消えた村がたくさんあった。自給自足で暮らした人々というくりに言えば、戦前までは人民の大半にも及ぶ。にもかかわらず、彼らは歴史にほとんど登場しない。

★国民主権の憲法施行から74年、いつも底辺の人々がしっかり視野に入った政治を望みたい。コロナ禍の今、一層それが求められている。(大橋健司)

